

日本の未来を問う

初出「ボルテ・チノ日本の心」7号
『日本の言霊が、地球を救う』所収

2011年4月

第三の問いを発進させよ

山波言太郎

〈目次〉

- 一、 尖閣諸島問題は、第二の黒船襲来
 - 二、 いつまでも「核の傘」ありと思うな、能天気日本人たち
 - 三、 二つの問い、卑怯者となるか、愛国者となるか
 - 四、 人よ、第三の問いを発せよ
 - 五、 イエスは歴史転換のために、生まれて死んだ
- 結語、殺人剣から、活人剣へ、庶民の〈青人草〉化で出来る

〈参考〉編集後記（「ボルテ・チノ日本の心」第7号）



「ポエジーから予言までかけぬけたもの」というリルケの言葉を、山波言太郎はよく知っていました。それは自分自身のことでしたから。山波の詩はすべてインスピレーションによるものです。空間に浮かぶ文字を写した天啓の詩、自分の前世と思われる詩、戦死者からの詩などですが、最も特筆すべきは、人類に警告を発する予言の詩の一群です。次の巻頭論文では、山波が自作詩「霧蜻蛉」を自ら予言詩として取り上げ論じています。この詩は現在の日本人に警告を発する予言の詩のようです。「霧蜻蛉」は1982年9月5日に制作されていますが、正にこの詩は28年後の2010年9月7日の「尖閣諸島問題」を予言していました。

尖閣諸島問題は日本の危機、第二の黒船襲来であると山波は論じています。日本よ「太平のねむり」を覚ませ、日本はこの危機から人類史の転換をせよ、その使命があると言っています。

尚、本論文は、2011年3月11日の3・11東日本大震災の直前に執筆されています。日本の大危機である3・11について、本論文を掲載した『ポルテ・チノ日本の心』第7号の編集後記で山波は触れているので、参考として本論文のあとに掲載します。

日本は今、世界の歴史を転換させる役目を請け負われています。戦争をした文明史から、戦争をしない文明史へと、人類史のコペルニクスの転換。

日本人よ、第三の道を選べ！

山波言太郎 本文より

一、尖閣諸島問題は、第二の黒船襲来

十五〜六世紀の大航海時代以来、西欧の力は西力東漸と呼ばれる勢いでアジアに迫りました。十九世紀には資本主義経済制度、民主主義の政治社会体制をとりつつ、全世界をも植民地化する力となってアジアを覆います。眠れる獅子の清もアヘン戦争（1840〜42）で英国に屈し、半植民地化の一步を踏み出します。その十一年後、米国のペリーが浦賀に来航し（1853）、鎖国中の日本に開港を迫ります。これが黒船の襲来です。

泰平のねむりを覚ます上喜撰

たった四はいで夜も寝られず

（注）当時の狂歌

四隻の黒船（大砲を備え、蒸気力で走る軍艦）に、日本国は震えあがります。科学技術で裏打ちされた武器、その背後にある資本主義の経済力、それと国民を合理的に一つに統合させる民主主義国民国家。この西洋近代文明の底しれぬ威力に、日本はたじろぎ

鎖国の夢が破られたのです。これが第一次黒船襲来です。

日本はアジアで一つ、いいえ欧米以外の世界でただ一つ、西洋式近代化を自力で急速に成し遂げた稀に見る国です。日清、日露戦争を経て、白人の大国ロシアを破り近代式軍隊と、立憲君主体制と、資本主義経済制度を具えたアジア唯一の独立国家として君臨しました。ただ好事魔多し、出すぎた杭は打たれる、ハッキリ言う和黄禍論的人種の偏見から、第一次大戦後は欧米諸国から寄つてたかつて窮地に追い込まれます。日本はそれに独力で対抗するため、満州事変を始め、日中戦争へと進み、太平洋戦争へと突っ走りました。これは近隣アジア諸国からは侵略に見えた面もあるかもしれませんが。窮鼠猫を噛むというより、罠にはめられた一匹狼の哀れな末路が敗戦（1945・8・15）です。

ただこの敗戦は、日本の試練、厄落とし、歴史の足踏みの時間帯です。なぜなら、突如起こった尖閣諸島事件（2010・9・7）、これは敗戦に密着した歴史の部分です。つまり第二の黒船襲来、日本人の眠りを覚ますための（六十五年間の戦後レジームの休憩時間帯を置いただけの）、西洋近代文明の第二襲撃。でも、尖閣諸島でぶつつかって来た船は中国船でしょうか？ いいえ、あれは西洋文明です。西洋発の共産主義と、御都合市場経済化の資本主義と、それと核武装という近代科学の武力の粋を笠に被った、ノコノコ後から

近代化した中国人の脅かし襲来です。全く同じ、お金と武器の力にモノ言わせて、相手の身包みみぐるを剥ぐケモノ動物方式の西洋文明です。

一難去つて、また一難、日本は明治維新で黒船襲来をうまく躲かした積りが、未だ本当は躲かしていなかったという、歴史的現実は今、気付かねばなりません。これが今、日本人に求められている日本人の目覚めです。

二、いつまでも「核の傘」ありと思つな、

能天気日本人たち

日本は敗戦で平和国家になりました、世界で唯一の。戦争放棄の日本国憲法は、世界史上の金字塔です。なぜなら、人類五〇〇〇年の文明の歴史は、戦争の連続でしたから。平和と幸福は強い武力で克ち取る、守る。これがこれまでの人類の鉄則です。それを日本人はアツサリ捨て、憲法で世界に宣言し、自己に不戦の鍵を取り付けました。

でも、これで平和安全が保てるのか？ ちよつと不安だから、アメリカと「日米安全保障条約」を結び、今、強力無比のアメリカの軍事力で守って貰っています。いえ、守って

くれると安心しきって戦後六十五年間を過ごしました。特に、一番恐い核兵器がアメリカは世界一なので、大安心、「核の傘」の下でノウノウと平和を楽しむ太平楽を決め込みました。

ところが、降って湧いたような尖閣諸島で（2010・9・7）、中国船が日本の巡視船に体当たり、それは日本の領海内でした。日本は中国の船長を逮捕、領海侵犯や不当体当たり行為を、日本の法律で裁こうとしました。でも、アッサリあきらめて船長を釈放し、不起訴無罪放免としました。あろうことか中国は日本に謝罪しろとか逆に居直り、釈放船長は手柄をたてた凱旋將軍さながら。拍手喝采で帰国しました。なぜこんな事に？

中国が恐いからです。中国は急速に軍事力を強化、核装備も始めています。もうアメリカとおつつかつつです。これで日本の安全主保障は大丈夫でしょうか。アメリカの「核の傘」頼りの、日本国の能天気「平和憲法」平和は、これからも野放しでいいのでしょうか？

私は二十八年前に、詩「霧蜻蛉」を書き、今日の（2010・9・7の）尖閣諸島問題を殆んど適中予言していました。

霧蜻蛉

呉淞^{ウーソン}の砲台から見ていると

ふしぎなことに

日本までが見えるのだ

一〇〇〇カイリもある東支那海が

血染めの日の丸になって

空に映っている

へたしか一九九九年まではそのまま

決してはためくことはないが

ぜいたくになれきった日本人と

まだ貧しさからぬけきれない「支那人」の

馴れ合いの会話が洩れている

蘆溝橋や柳条湖^{*}の方は

遠くてここからは見えにくい

誰かが霧をまいているとしか思えない

ぼやけたまま 血染めの日の丸が映っている空に

今日は中国キリトンボ科の群が

無数の烈しさの祝宴の

真似をしている

*柳条湖は満州事変（1931）の、蘆溝橋は日中戦争（1937）の、戦争勃発の引き金となった地名

詩集『軍靴の歌』より 〈1982・9・5作〉

〈キリトンボ科の群〉とは何か

見えない、羽の生えた、核弾頭つけたミサイルのことです。中国は弾道核ミサイル（大気圏外を人工衛星みたいに飛んで行く、核弾頭を付けたロケット式飛翔体）を持っています。それにはICBM（大陸間弾道ミサイル）も、SLBM（潜水艦から発射する弾道ミサイル）もあります。コンピュータで大気圏外を誘導され長距離を飛ぶので、見えない大型の脅いキリトンボです。それと巡航核ミサイル（飛行機式の核ミサイル）もあります。